

令和7年度 小平市立小平第十一小学校 学校評価報告書

学校教育目標	気品と気概のある子 ○かしこい子 自ら学び、考えて行動し、責任をもつ子 ○つよい子 めあてを決めて最後までやりぬく子 ○やさしい子 友達と仲良く協力し合う子
---------------	---

目指す学校像(ビジョン)	【目指す学校像】 未来への夢や希望を抱き、切磋琢磨し、成長を実感できる学校。「学ぶ力がつく学校」「安全・安心できる学校」「豊かな経験・挑戦ができる学校」「協働(参加・参画)できる学校」 【目指す児童・生徒像】 自分で考え、自分で決めて(選び)、やってみる児童。「自ら学び、考えて行動し、責任をもつ子」「めあてを決めて最後までやりぬく子」「友達と仲良く協力し合う子」 【目指す教員像】 すべての教職員が児童の育成に自覚と責任をもち一人一人を大切に目をかけ、声をかけ、手間をかける。切磋琢磨、授業力・指導力の向上に努め資質を高める教師を目指す。
---------------------	--

前年度までの学校経営上の成果と課題

【成果】短作文や振り返りを書く取組の実施により、意欲的に文章を書く児童が増加した。また交換授業・教科担任制の実施では、児童・保護者からのアンケートで肯定的な回答が多く、児童の基礎学力の定着、学習意欲の向上につながった。

【課題】児童の体力の向上や地域・地域人材を活用した教育活動を進め、学校経営方針を実現させるような手立てを計画的に立案、実施していく必要がある。
 ・新規採用を含め、若手教員が多い中、校内でのOJTや研修を通して学校全体の教育活動を組織的に進められるようにしていく必要がある。

	具体的方策	第1回評価		指標に基づく成果・課題・対策	第2回評価		学校関係者評価	指標に基づく成果・課題・次年度以降の対策
		取組指標	成果指標		取組指標	成果指標		
確かな学力の定着と向上	①朝学習での全校短作文、授業での振り返り・まとめ等を通して考え「書く」学習を行い、「書く力」の向上を図る。 ②「教科書」の熟読と視写の取組等を通して、「教科書」を正しく読む力、基礎的な理解力の向上を図る。	4	3	1学期から短作文や、振り返りの記入を通して、「書く」機会を増やしてきている。「読む」力についても同様であり、少しずつ上達も見られてきている。①②どちらも1割程度は苦手意識のある児童もいるが、具体的方策に示している取組を継続することで、意欲や基礎学力の更なる向上につなげていく。	4	4	・書く力を付けるために、月1日記を指定するなど、自分の考えをまとめてから書く練習をもっと行ってもいいのではないかとと思う。 ・教科担任制はクラス間での指導のばらつきもなく、教員の負担も減らせるのであればよい取組だと思う。	児童アンケート「すすんで文章を書いている」では、肯定的な回答が1学期83%、2学期84%と横ばいであった。月1回の短作文や各教科等の振り返りの記入が定着しつつある。「正しく読むこと」と合わせて、国語学習だけでなく、学校教育全体で発達段階に応じた「読む・書く・話す・聞く」等の指導を継続し、引き続き児童の学力向上を目指す。
	①低学年では交換授業、中学年以上では教科担任制を進め、教科ごとの指導を充実させる。 ②教科ごとに児童アンケートを年3回実施し、結果を分析することで授業改善につなげる。	4	4	児童アンケートの結果、肯定的な回答が8割を超え、交換授業や教科担任制の取組が児童にとって効果的であると考えられる。今後は、さらに発達段階に合わせて段階的に交換授業から教科担任制に移行できるように取り組んでいく。	4	4	児童アンケート「交換授業・教科担任制の取組」では、肯定的な回答が1学期88%、2学期94%と、多くの児童が肯定的に捉えていることが分かる。担当する教員が、その教科等の教材研究をする時間が以前よりも確保でき、より質の高い学びを実践できる場が整いつつある。保護者アンケートでは、「基礎学力の定着」について85%、「学習指導の工夫」について90%の肯定的な回答を得られており、いずれも6月から増加している。保護者から見ても、教科担任制の実施は肯定的に捉えられているので、引き続き授業改善に努めるとともに、公開授業等で様子を見ていくようにする。	
	①すべての学年、学級の授業、家庭学習において、発達段階に応じたICT、デジタルドリルなどの活用内容を計画し、活用を図る。	4	4	授業中の肯定群は88%と高い。今後も学習に合うツールの選択を教師も子どもができるようにしていく。一方家庭学習の否定群が12%である。家庭学習でも一人一人の学びに合うツールの選択を子ども自身ができるようにしていく。	4	4	・授業で端末を使うのは効果的だと思う。しかし、宿題のデジタルドリルは知識の定着には不向きだと思う。算数ほどの程度理解できているのか見えにくく、親がフォローしにくい。 ・児童は学習者用端末を使いこなしていると感じた。学力向上に寄与していると感じる反面、それ以外のどうかという点に不安を感じている。	2月実施の児童アンケートでは、学習者用端末を用いた学習の取組について、93%の児童が肯定的に回答し、5%増加している。一方で家庭学習の取組での使用について、否定群が増加している。学校関係者評価でも課題があげられている。今後も、学校での学習や家庭学習において、デジタルを使用することの良さや学習の定着のエビデンスを面談等で示していく。また合わせて、デジタルとアナログの最適な活用を研究していく。
	①多様な読書活動(朝読書、読書旬間、なかよし班での読み聞かせ・ピプリオバトル等)の実施をする。	4	4	6月実施の児童アンケートの結果は高い数値であった。引き続き読書活動に対して意欲的に取り組めるよう、「十一小の11冊」「読書カード」の取り組みや読書旬間・ピプリオバトルなどの活動を推進し、読書量の向上を図る。	4	4	・児童は学習者用端末を使いこなしていると感じた。学力向上に寄与していると感じる反面、それ以外のどうかという点に不安を感じている。	2月実施の児童アンケートでは、読書活動に対して肯定的な回答をした児童が86%で、年度当初より僅かではあるが増加した。これは昨年度と比べても向上している。「朝読書」「十一小の11冊」「読書カード」などの日常的な取組や担任からの声掛けなどが読書活動を後押ししていると思われる。日常的な取組を継続すると共に、読書旬間でも一層の推進を図る。
健やかな心と体の育成	①年3回のあいさつ運動、アンケートの実施などから児童が工夫して取り組む。 ②毎朝、教室や玄関で児童を迎え、教職員からすすんで何ども笑顔であいさつをする。	4	4	1学期になかよし班あいさつ、六中校区の標語をもとに計画代表委員会の校内練り歩きを行った。また毎朝、教職員からすすんで何ども笑顔であいさつをする等の取組の結果、児童の肯定的な回答は8割を超えた。今後は小中連携で中学生とのあいさつ運動も計画している。これらの活動をホームページ、学校だより等で発信していく。	3	4	・学校の中だけではなく、学校の外でも挨拶してくれる児童が増えているという評価もある。一方、自分からあいさつができる子どもが少ないという評価もある。 いじめ認知件数が多いことは、先生に直接言っていないことでも、ふれあいアンケートには書きやすいのかも知れない。これらも定期的なアンケート実施をお願いしたい。 ・教員にとってもひりひり抱え込まないというのは精神的な負担感が軽減されよと感じた。	児童アンケート「日頃から、先生や友達に自分から挨拶している。」に対する肯定的な回答が1回目81%から2回目84%へと微増した。異学年と一緒に日頃あいさつ運動、中学生と合同でのあいさつ運動、計画代表委員を中心としたあいさつ練り歩きの活動等を通じた継続的な取組が成果となっている。次年度以降もこれらの取組を継続・発展させていく。
	①いじめ見逃しゼロに向けて児童へのアンケート調査を年3回以上実施し、未然防止と早期対応に生かす。 ②週1回の生活指導連絡会やいじめ対策委員会を開催し、いじめ対策に学校全体で組織的に取り組む。	4	4	児童へのアンケートの実施や対応、相談先の情報提供、生活指導連絡会、いじめ対策委員会の開催等、学校全体で組織的に取り組んでいる。児童にとって相談しやすくなったと感じていると思われるが、「学校で不安や悩みがあった時は、だれかに相談できる」で肯定的な回答が少なかった。質問内容の補足説明をして児童の実態をより適切に捉えられるようにする。	3	4	児童アンケート「友だちに思いやりをもって接し、いじめをしないようにしている。」に対する肯定的な回答が1回目91%から2回目96%へと増加し、これは昨年度末の93%を上回っている。新たに示された「いじめ総合対策[こども版]」を活用した児童への指導や、ふれあい月間に実施したアンケートの記入に対する教員の丁寧な対応が成果につながったと考えられる。次年度意向も継続していく。	
	①運動量を確保した体育授業の改善、休み時間の外遊び・体育館遊びを推進し、児童がすすんで体を動かせるようにする。	4	4	安全に配慮して校庭遊びを推進したり、「なわとびカード」の級を達成した児童の廊下掲示を含めて「なわとび」に年間を通して取り組んでいる。今後は全校での持久走に取り組む、学校だよりやホームページで保護者に伝えるべく。	3	4	・体育館を休み時間に使用できるようにしてくださったのがありがたい。 ・6年生の学習発表会を参観して、日頃の学びが伝わっていることを感じた。自己分析して、将来に向かってどのようなロードマップを描くのか楽しみである。 ・なかよし班での交流も上級生は自分の役割をしっかりと果たしていい取組だと思う。	児童アンケート「体育の授業中や休み時間に、すすんで体を動かしている。」に対する肯定的な回答が1回目80%から2回目87%へと増加した。休み時間の校庭や体育館の使用割り当てや、持久走の取組、体育の授業改善等が成果につながったと考えられる。次年度以降、「校庭に割り当てられた学年は全員外に出るといきまわりを見学したり運動を工夫したりすることで、より多くの児童が気持ちよく体を動かせるようにしていく。
	①自分の生き方を考える学級会やキャリア教育を学級活動や総合的な学習の時間で実施する。 ②異学年交流(読み聞かせ、あいさつ運動、なかよし班等)の充実と年間を通じた計画的実施を行う。	4	4	児童アンケートの結果は高い数値であった。校内研究で学んでいることを活かして全学級で学級活動の実践がなされているといえる。異学年交流の大きな行事「なかよしフェスティバル」で、児童が主体になって協力しながら活動を進めていくことで、上学年は下学年のことを考えながらリードする態度を育て、振り返りカードを活用する。	4	4	・ボランティアがいることで先生の助け、子どもの助けになるので、もっとみんな参加してほしい」ということを保護者会などで学校の方からアピールしてほしい。一部の人がだてで回しているような感じも、ミンの時期は楽しいけれどとても大変である。 ・教育活動を充実させるために、CSがどういうことを思っているか聞いて声を掛け合っていること、また必要なのはいいと感じている。 ・教育活動を充実させるという目標に少しずつ近づいている。地域人材を増やしたいと思う。	児童の発達段階に合わせて自分の生き方を考える学級活動やキャリア教育、異学年交流を年間を通して計画的に実施した。児童の自己評価でも学級活動にすすんで取り組んでいる児童が約85%、異学年交流活動にすすんで取り組んでいる児童が約89%となった。次年度も、年間を通じた計画を立てて実施していく。
業務改善・働き方改革	①地域・地域人材を活用した学習(農園・校外学習等)を行う。 ②学校支援ボランティアを活用する。 ③CS委員の協力を得た学習活動の充実。(CSカレンダー、漢字検定、各種コンクールの出品)	4	3	学童農園、低学年の町たんけん、水泳指導、ミンの学習、委員会での花壇の整備などにおいて、地域の方や学習支援ボランティアの方に協力していただいている。保護者アンケート項目「地域の人たちとふれあう活動を充実させている」では、「分からない」と回答した割合が14%となった。日常的な取組や学校だより等での発信を充実させていく。	4	4	・ボランティアがいることで先生の助け、子どもの助けになるので、もっとみんな参加してほしい」ということを保護者会などで学校の方からアピールしてほしい。一部の人がだてで回しているような感じも、ミンの時期は楽しいけれどとても大変である。 ・教育活動を充実させるために、CSがどういうことを思っているか聞いて声を掛け合っていること、また必要なのはいいと感じている。 ・教育活動を充実させるという目標に少しずつ近づいている。地域人材を増やしたいと思う。	学童農園、生活科、総合的な学習の時間、家庭科、花壇の整備などの取組において、CS委員、地域、学習支援ボランティアの方々との協働により、児童の学習を充実させることができた。2月実施の保護者アンケートでは、肯定的な回答が17%上がった。今後は地域との交流を計画的に実施し、つながりを深めていく。
	①月一回、学校で定時退勤日の設定をし、職員の時退勤を推進する。	4	3	月一回、定時退勤日を設定し、予定表に明記したりタリタリ会で周知したりしている。出勤の際には退勤予定時刻をマグネットに掲示しているが、提示退勤を推進するという教員アンケートによる肯定的な回答は75%となった。引き続き表示を活用し、意識を高めていく。	4	3	職員への定時退勤への設定を月に一回ずつ継続的に言い、週予定に明記したりタリタリ会で呼びかけたりしてきた。教員アンケートでは、意識は高まってきたが、実際に推進することについては、肯定的な回答が少なかった。引き続き業務の進め方等を確認したりお互いに声を掛け合っていること、また必要なのはいいと感じている。	
	①効率化の中で既存のものも価値を見直し、各分掌等で作成する書類を精選する。	4	4	会議や打ち合わせの回数を見直し、作成する書類を分掌内で吟味したりしている。「作成する書類を精選する」の教員アンケート結果は85%が肯定的な回答となっており、意識して効率化を行うことができていることが分かる。	4	3	経営会議、運営会議、四部会等で話し合う内容を精査し、計画的に実施した。またデータを事前に共有することで、効率的に会議を進めることができた。自己申告の面談では自己の働き方を振り返り、校内・学年・学級等での業務を見直し、改善を図った。その結果0%以上の教員が「実際に取組むことができた」とアンケートで回答している。今後も継続して効率的な業務の遂行を行う。	